

「プロメテウス」人類に火を与えたギリシャ神話の神族

プロメテウスの畏わな

英国での検問 ⑨

怖さ、知らなかった

首相補佐官だった馬淵澄夫(51)は2011年6月11日、東京電力の作業員とともに、福島第一原発4号機の建屋に入った。

中は真っ暗だった。天井を見上げて「この上に使用済み核燃料プールがある」と考えると、なんともいえない圧迫感があった。

馬淵は官邸で、原発の放射能漏れを封じるプロジェクトを担当してい

た。建屋に入ったのは、4号機の使用済みプールの崩壊を防ぐ補強工事の確認のためだった。

東日本大震災の時、4号機は定期点検中で止まっていた。止まっていたことは「安全」を意味しない。定期点検するためには、いったん原子炉を止めて、使用中の核燃料を外に出す必要がある。

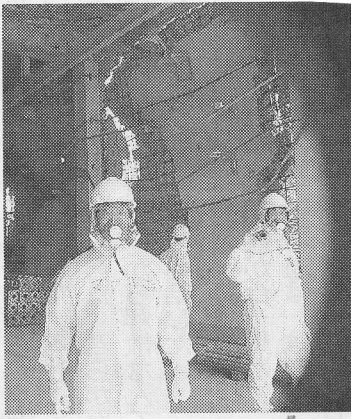
使用済みプールには「カッカッカ

と燃えている核燃料」（馬淵）を、一時的に保管する役割もある。

燃料棒をプールに入れるのは、水が危険な中性子を遮るためだ。水から出せないため、燃料棒は、原子炉とプールをつなぐ水路の中を移動させる。だから、プールは、原子炉の入り口に近い高い場所にある。

しかし、余震などでプールが壊れると、燃料を浸す水がなくなる。そ

原発建屋に入った馬淵澄夫議員



うなれば再臨界を起こしてしまう。馬淵はそれを防ぐ工事を指揮した。

4号機のプールには、核燃料集合体1590体が入られる。底は厚

さ4分のコンクリートだ。だが、大きな余震に耐えられる保証はない。そこで、下に鋼鉄の支柱を何本も入れ、コンクリートも加えて固めた。馬淵は振り返る。

「使用済み核燃料プールなんてものは知らなかった。こんなに怖いものかということも。しかも全国の手配の原子炉にある。今回のようなことで事故故になりかねない」

馬淵は11年8月、民主党代表選に立候補した。そこで、原発の「バックエンド問題」を訴えた。それは6月の圧迫感ももたらした。

「バックエンド」とは、使用済み核燃料をはじめとした原発の後始末だ。これを考えずに、電力需要への対応が優先され、どんどん原発がつくられた。

「再処理が建前だから使用済み核燃料は保管する。しかし実際には再処理はできていない。排出物はたまり続ける。まさに『トイレなきマンション』なのです」

代表選に敗れた馬淵は、民主党有志で「原子力バックエンド問題勉強会」を立ち上げる。背景には「最悪のシナリオ」があった。(松浦新)

2012.03.02 朝日新聞